

大学出版

'99 春

No.41



大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会



大学出版

41号

Spring · 1999

読書の周辺	バルザックと活字——生誕二百年によせて——	柏木 隆雄	1
読書の周辺	標本・文献・インターネット——	大原 昌宏	6
読書の周辺	ネットワーク型読者環境の誕生——	濱 森太郎	11
大学出版部と母体大学との関係	—— 続・岐路に立つ大学出版部 ——	渡辺 勲	13
歩く・見る・聞く——知のネットワーク			14
大学出版部ニュース			19
新刊案内'99・1〜'99・3			27

表紙イラスト ヨースト・アマン「職人図鑑」より
大学出版部協会マーク・デザイン 道吉 剛
〈書籍の価格は本体価格で表示〉

バルザックと活字——生誕二百年によせて

柏木隆雄

消え行く活版印刷への思いを寄せたエッセーを集めた『活字礼讃』（活字文化社刊、一九九二年）に、グラフィックデザイナーの杉浦康平はこう書いている。

「一つ一つの活字とは、じつはわれわれ一人一人なのではないだろうか。グーテンベルグが発明した活版印刷のシステムとは、人々が群れ集う市民社会の縮図であり、その暗喩としての役割をも果たしてきたのではないだろうか。」

こうした活字印刷のシステムを、直に自分の手で習いおぼえ、自分の目に焼き付けた人間が、どうして文字に無関心でありえよう。どうして言葉に冷淡でいられよう。どうして個のあつまる集団に心を向けないでおれようか。かれらが活字に代えてペンを取った時、個と社会の現象に深い洞察を示す文章を書き記すようになるのは自然の成り行きだろう。

英雄豪傑でない普通の少女が主人公の『パミラ』によって近代小説が始まったとされる。その作者サミュエル・リチャードソンは、ようやく産業社会、情報社会に入ろうと

するロンドンの活版印刷が本業だった。活版印刷のシステムが「人々が群れ集う市民社会の縮図であり、その暗喩」という言葉は、印刷工リチャードソンが、はからずも近代市民小説の創始者となった事実、ぴったりと符合するよう思われる。

今年生誕二百年を迎える十九世紀フランス最大の小説家オノレ・ド・バルザックも、二十代の青年の頃、活版印刷所を自から手がけている。そればかりか、リチャードソンのように出版者として本も出し、さらに、リチャードソンも手をそめなかった活字の鑄造業にまで手を出すほど「印刷」というものにどっぷり漬かった男だった。バルザックの面白いところは、活字の埃にまみれ、インクに手を汚す生活を送った後作家になったリチャードソンとまったく逆のコースをたどったことだ。もともと彼は出版業に手を出す前に、変名の若書きながら、いっぱしの小説家としてスタートしたことがある。バルザックこそは活字の魔に最も魅いられた小説家であった。

濃いコーヒーをガブガブ飲みながら、ペンの運びの最も凄まじい折りには、一日に十八時間も書き続け、ペンの進みの悪い日でも九時間、よくも悪くもない日には十二時間、休みなしに創作に耽った輪転機のような多作家。空想の世界では実業を夢みて幾百万フランの利益を精密に計上したが、実生活においては、払いきれぬ借金のために、書いて書いて書きなぐった小説家。

これは日本のフランス文学研究の草分け故辰野隆教授がバルザックについて書いた短文の冒頭である。バルザックの精力絶倫の多作を語り、彼のうかつな生活者としての姿をみごとに一筆で浮き彫りにする名言だ。そしてじつはこの短文のなかにもバルザックの小説家としての本質と活版印刷とのかかわりの暗示が見いだされる。「輪転機のような多作家」は、まことに言いて妙、彼の早書きはちよつと信じられないくらいである。

夜に日をついでとにかく原稿を書き上げて印刷所に渡す。初校が戻ってくるものすごい訂正や書き込みをして返し、二校ではいっそうさかんに訂正してさらに分量がふくらんでいく。バルザックはしばしば印刷屋から超過料金を請求され、それも彼の膨大な借金をふやすことになった。

このことは、いかにバルザックが湧き出る構想のおもむくままひたすら書きなぐったかを示しているが、彼が活版印刷に精通していればこそできたのだろう。ペンで書きな

ぐった原稿が印字もあざやかに整然とならんだ校正刷りが出てくれば、彼の幻視的な想像力がいっそう刺激されて、言葉が次から次へと浮かんでくる。

ゲラ刷りばかりではない。一八四二年に刊行を始めた『人間喜劇』全十七巻は、結局彼の死によって中断されたが、バルザック所蔵のフルヌ版『人間喜劇』の一冊一冊すべてには、再版にそなえて彼自身のペンで克明な書き込みがされている。単純なミスプリの訂正もあれば、頁や見返しの余白一面に書き加えてなお足らず、新しい紙を貼りつけてびっしりと書きつけているものもある。つまり仕上がった本までも校正刷りと同じ扱いなのだ。現在われわれが読んでいるバルザックのテキストは、バルザックの最終的な加筆をおこして再編集したものだ。

『人間喜劇』は、長短の小説あわせておよそ九十編、現在もつとも信頼のおけるプレイアッド版で十二巻およそ二万頁におさめられている。プルーストの長編『失われた時を求めて』でも、詳しい注と元原稿の参考編をあわせて四巻なのだから、「輪転機のような」という形容もうなずけるだろう。しかもこれはバルザックが三十歳から五十歳までの仕事である。

そのうえ十八年間愛人ハンスカ夫人に書き続けた手紙が五巻、他の友人、知己に宛てた手紙が五巻、これでおサロンにも出かけて社交もおろそかにせず、あちこちヨーロッパ各地を旅行したりしているのだから、いったいどれだけ

の速度でペンを——それも万年筆のある時代ではなかった——走らせていたのかと驚いてしまう。

もっとも書いた量の多さと言えば、バルザックと同時代の作家アレクサンドル・デュマの作品集は、地図帳ほどもある大判に細かい活字で二段組みのものが二五巻もならんで、しかもそれは小説のみ、別に数巻からなる戯曲集がある、というのだから上には上がある。当時もっとも人気があつて、デュマとともに原稿料の高さでバルザックをくやしがらせたウジェーヌ・シュエも多作だが、デュマにはけっきょく及ぶまい。デュマの大量生産の秘密は、工房ともいうべき助手たちの存在にあるが、バルザックも劇作家志望のラッサイなどを助手に使つていたことがある。

しかしこれほど原稿を書き散らして、大量の本を売りまくつたにもかかわらず、両者ともどうしようもないほどの借金で苦しんでいた。デュマの借財はその豪奢な生活のつげがまわつたのが最大の原因だが、バルザックの場合は、「空想の世界では実業を夢みて幾百万フランの利益を精密に計上しえた」ものの、じつさいはその精密なはずの計算がみごとにはずれ、事業早々四年ともたずに莫大な借金をかかえて倒産したのである。そしてその借金に一生苦勞することになった。その事業が、まず出版、それが失敗して印刷、そして活字鑄造なのである。

バルザックは、出版、印刷という近代資本主義社会での必須の情報メディア産業に乗り込んで一本立ちをした上で

大金をもうけ、さてその金で悠々と執筆に専念するつもりだった。しかしそのもくろみはみごとに外れる。法律家として成功してほしい両親の願いに背いて、バルザックは大学を出たあと六歳年長の大衆作家ル・ポワトヴァン・ド・レグルヴィルと知り合い、ローヌ卿とかオラース・ド・サン・トヴァンといったペン・ネームで、今日いわゆる『初期小説集』におさめられる作品を書き綴つた。その間およそ六年、当時流行の大衆小説のあらゆるジャンルに挑戦しながら、結局それらは華々しい成功をみず、バルザックは家からの仕送りを断たれ、家族のもとに帰らざるをえない。その時、当時前衛文学だったロマン主義関係の本屋ユルバン・カネルが、モリエールやラ・フォンテーヌの一冊本の全集を出す企画をもっていることを耳にする。

バルザックの伝記を書いた妹ロールは、コンパクトな一巻本の個人全集は、兄の創案と言うが、事實はカネルもすでにそのアイデアを持っていたらしい。相談の結果、バルザック一人の発行ということになって、多額の資金は母親と二二歳年上の愛人ベルニー夫人が負担した。ところが出版した『ラ・フォンテーヌ全集』は、三千部刷つて売れたのはわずか二十部、同じ体裁の『モリエール全集』も惨たるありさまだった。

その『ラ・フォンテーヌ全集』が私の手元にある。赤いカルトンの表紙の、A5判を細身の縦長にした八折り本のこの本は、売れた二十部のうちの二冊だろうか。あるいは

破産したバルザックの財産整理をした本屋から出たものなのか。本の扉には『ラ・フォンテーヌ全集』とあって、ドヴェリア画、トンブソン彫版のラ・フォンテーヌの肖像画があり、左の白い頁に出版者バルザックと印刷して住所も付してある。

最大の問題は一冊に全部を収めるために、ものすごく小さな活字を使用したことだ。バルザックが巻頭に書いた「解説」はまだ読めるが、本文の活字はいわゆるミニオンヌと呼ばれる7ポイントでごく小さく、しかも縦長の紙面に二段となるときわめて読みにくい。比較的短く、余白も多少ある詩などは我慢すればなんとか読めるが、『プシケーの恋』といった長編詩は、よほどの忍耐がいる。『全集』と称するだけに全四九五頁、価格もさうとう高かった。この手の本は高ければ売れるわけがない。

バルザックはこうして本を印刷している時、本当に売れるかと思っていたのだろうか。当時大作家の全集といえば、大きな本で数巻とか、あるいは手のひらに入らぬ貴夫人がもてあそぶに優雅な小さい本で数巻、ときには十冊以上になった。一巻で大作家のすべてが読める、このアイデアは画期的と思えたことだろう。活字好きのおちいりやすい畏である。活字の魔にバルザックは魅いられていたのだ。大作家のコンパクトな全集本というアイデアに酔っていたバルザックの思惑は、みごとにはずれて彼に一万四千フランの借金を残すことになった。

私の机にもう一冊、若いバルザックの苦闘の形見がある。一八二八年刊の八折り本の『故シャミー子爵夫人遺稿同時代情景集』である。これは架空の故シャミー子爵夫人を名乗る複数の作者が、王政復古下、旧貴族たちの旧態依然とした体質を風刺した戯曲仕立てのスケッチ集で、のちの人氣挿絵画家アンリ・モニエが口絵を描いている。その彩色の口絵の扉の左の頁にバルザック印刷所とある。出版者は例のユルバン・カネル。もちろん使用している活字は大きく、余白も十分とって印字も濃い。バルザックは最初の失敗にもめげず、先述の全集のさい知り合った印刷職人バルビエと組んで一八二六年に印刷所を始めた。開店の時、本屋の債務に加えてさらに六万フランの借財がすでにできている。

二年間、バルザックは印刷工場に陣取りながら、インクと埃にまみれて悪戦苦闘する。オノトー、ヴィケール著『バルザックの青春 印刷屋バルザック』によればその間印刷したものは一六〇点余。その中にはシェイクスピア全集もあれば、料理の本、『一銭も支払わずして借金を返し、債権者を満足させる法』などというものもある。これを印刷するときバルザックはどんな顔で校正したことだろう。

こうした自転車操業というもおろかな経営で、請け負う仕事も多くないままに、バルザックはさらに活字鑄造の会社共同経営者になる。それも状況をさらに悪化させるばかりで一八二八年八月、彼は印刷、鑄造ともに手を引かざ

るをえなくなった。清算してくれた母親への五万フラン近い借金が、二年間の事業で彼が得たものだった。バルザックの活字鑄造所は、ベルニー夫人の息子が加わってたて直し、やがてパリ有数の会社となる。それはちょうど二十世紀になってプレイヤッド叢書とか、スイユ社のアンテグラル叢書などコンパクトな全集一巻本が成功して、バルザックのアイデアが隆盛しているのと同じ皮肉な結果である。

印刷撤退を余儀なくされた「家の馬鹿息子」バルザックは、再び小説を書くことによって活路をみいだそうとした。彼はベルニー夫人や彼の文学の先達ラトゥッシュに励まされながら、新しい小説の構想を練る。折から流行の歴史小説に活路を見いだそうと、借金を背負ったままパリを発ち、ヴェンデ戦争の中心地の一つフージュールに約一カ月滞在、『最後のふくろう党あるいは一八〇〇年のブルターニュ』を書いた。一八二九年、小説家オノレ・バルザック（この時はまだ貴族を僭称するドはつけていない）の誕生である。バルザックの三年あまりの出版事業は、あまりに無残な結果におわった。多くの批評家や研究家は、バルザックの空想の大きさと現実との齟齬をいう。事業家としてのうかつさを、のちに作家バルザックが築きあげた『人間喜劇』の壮大な宇宙と比較して、ほほえましくとらえる人もある。しかし多大の借金を抱えながら、なお活字の世界に彼をのめりこませていったものは何だったのだろうか。出版から印刷、活字鑄造への道筋は、単なる金もうけの筋道を立てた

だけでないものが感じられる。元へ、始めへ、原理へ、原理へとつきすすんでいくバルザックの本質がそこにあらわれていないだろうか。

できあがった本から、組版へ、そして一つ一つの活字へ、その活字の形さえまだ与えられていない鉛の湯へ。バルザックの精神は、ひたすら、文の、言葉の初源へ遡った。あたかも彼がのちに描く『絶対の探究』のバルタザール・クラウスがあらゆる家族の犠牲をかえりみず、「絶対」という宇宙の根源をなす物質を求めていったように、『知られざる傑作』の画家フレノフェールが絵画の絶対を求めて自らさえも犠牲にしたように。まるで点にしか見えない活字の黒い集積のなかに、彼は作家の根源を見ようとしたのではあるまいか。

読むひと、書くひと、作るひと。二年間現場で接した活字の海の中で、彼は作家たちの原点となるものを見ていたのだ。しかも彼が見たものは詩歌小説の類だけではない。彼の印刷リストには、菓の広告もあれば、薪炭商となる手引、政治所信の表明もある。歴史の逸話や名句集も彼の輪転機にかかった。ネクタイの締め方から法令集もある。外国人向けのパリ案内の記事もあった。

彼がそうした活字の海から、再びペンによって生み出される言葉の世界にもどった時、それらの活字は、彼の頭の中で、つむじ風に舞うように回りがら、自ずから自分たちの位置を定めていくのである。（大阪大学文学部教授）

標本・文献・インターネット

大原 昌宏

昆虫の種数と分類学者

近年、環境破壊の危ぶまれている熱帯雨林の生物調査が進み、樹冠部に多くの未知の昆虫が生息していることがわかってきた。

採集される昆虫の種が、熱帯雨林の多種多様な植物の樹冠ごとにちがうことから、この地球に生息している昆虫の「予想種数」は膨大に増えることとなった。多く見積もっても三五〇万種とされていた昆虫の種数は、二〇〇〇万種とか三〇〇〇万種とか、桁外れに誤差の大きい推定値に修正され、実際には、どれだけの昆虫の種がいるのか、よくわからないことがわかってきた。

昆虫の種数が増えると、それらに名前をつける分類学者は名付け作業に大わらわ……。実際はそういう訳ではない。

昆虫研究者には常識だが、昆虫に限って言えば、名無しの虫は珍しいものではなく新種の虫を血眼になってさがすほど、分類学者は研究材料に困っていない。したがって、

未知の昆虫がたくさんに見つかったからといって、さぼっていたのが急に働きだす訳ではなく、分類学者は今ままでおり淡々と仕事をこなしている。

年間一〇〇〇を超える新種が記載される昆虫の世界では、研究されるべき虫たちの標本が、収蔵室に山積みになっているのが現状である。むしろ昆虫分類学者の人手不足が解消すると、地球上の生物多様性理解が飛躍的に進むと考えられている。

分類研究が一足飛びにすすまない理由の一つとして、標本の作製や解剖といった細かい「手作業」に分類学が依存することがあげられる。他の科学分野は分析機器の進歩によりめざましい発展がとげられてきた（ようにみえる）が、殊に分類学は科学技術の発展の恩恵にあまりあやかっただけでなかった。いまだに「自動昆虫分類装置」とか「自動昆虫標本作製機」というのはお目にかかったことがない。

欧米よりもおよそ百年おくられて自然科学を始めた日本では、その分類学は、博物館の標本充実度やレヴィジョンの

出版数からみても、ほぼ百年分の遅れがあるかもしれない。手作業の遅れは、人海戦術か、新しい科学技術で取り戻すしかない。

インターネットと分類

そんな昆虫分類学にも、新しいテクノロジの波がやってきた。インターネットは、すでに目新しいものではなくなったが、身近になるとともに分類学に適した便利な道具であることが明らかになってきた。つまり、顕微鏡の横にインターネットに繋がったコンピュータを置けば、画面に現れてくるさまざまな情報を利用して、標本の同定がおこなえる時代になりつつある。同定作業中の傍らにある煩わしい文献や図鑑の山は消えることになる。

分類学は、膨大な生物データを使いやすくすばやく検索する体系をつくりだすことが目的の一つである。二〇〇年前は神の名のもとに生物を並べたが、現在は生物進化をとおして分岐した順番に分類群を並べる。単位は「種」であり、そこにおさめられるデータセットは標本データ、形態、生態、遺伝、分布データなど、その種に関わるすべての生物学的データが「種」の名のもとに従属される。これらのデータをモノグラフやレビュージョンといった論文にまとめることが、分類学者の日々の作業である。

膨大なデータを管理するのはコンピュータの得意とするところ、以前からデータベースを利用して標本管理を

行なっている博物館は多くあった。しかしそのデータベースは無味乾燥な種名と標本番号の対応リストだったり、標本の所在を教えてくれる番号が出てくる程度のものだった。

最近のインターネット上で公開されている分類研究者のホームページはもっと趣向が凝っていて洒落ている。例えば、キリギリスのなかまであれば、それぞれの「種」のタイプ標本写真、原記載、解剖スケッチが画面に現れ、ものによっては鳴き声までが、ボタンクリック一つで目の前のコンピュータから聞こえてくる (<http://viceroyn.eeb.uconn.edu/orthoptera>)。これだけ揃えば、手元の標本がどの「種」に該当するのか専門家でなくても（ある程度は）同定できる。従来の時間をかけた同定への準備作業はボタン一つで手にはいることになる。これは分類学にとって大きな進歩だ。

時間をとられる準備作業

一つの標本の名前を同定するために必要な「作業」を、分類学を理解していただくために記しておきたい。

まず文献に当たり該当の種を探しださなければならない。分類作業の集大成であるモノグラフや図鑑に当たる訳だが、該当する種がない場合は世界中の近縁な種を氾濫しにチェックする必要がある。種が新種として発表された「原記載」論文に当たることが要求されるが、分類学特有の事情として、動物命名規約により有効とされているかぎり、さまざま

まな国の言葉で書かれた二〇〇年も前の論文まで遡って探してこなければならぬ。苦勞して手に入れた論文も、一九世紀以前であれば、写真はもちろんのこと図も十分なものはなく、三行のラテン語記載しかもたらされないこともしばしばである。行間を読み込むが曖昧さは拭いきれず、こういう場合は原記載に用いた「タイプ（模式）標本」を調べる必要がでてくる。

日本や東南アジアの昆虫であれば、タイプ標本はヨーロッパ各国に所蔵されていることがおおい。手紙を出し（今では電子メール）、往復一か月ほどの時間をかけて標本を借り出し、タイプ標本のチェックをすることとなる。それでも該当しなければ、未知のものとして新種発表する。

標本の名前を同定するまで、こういった時間をとられる準備作業が必要ながわかっていただければ幸いである。この作業を分類学者は能率よく行なうため、専門のグループ（分類群）を決めて、ほぼすべての記載論文をあらかじめ集めておく。分類学者を志す多くの大学院生はコピー代で生活を圧迫される経験をする。数年の研究歴を経ると巡礼のようにヨーロッパやアメリカの博物館へ標本調べに訪れ、標本写真をとる、日本で手に入らない文献をコピーし、時間が足りなかった経験をして帰国する。

インターネットは、この準備作業をかなり軽減させてくれる可能性をもっている。

Web上の分類研究発表

実際に公開されている昆虫関係のホームページとして、日本で作成されたものでは「日本産アリ類カラー画像データベース」が優れている（図1）。図を見ながら検索表を辿っていくと種名がわかる仕組みになっている。他の生態的な情報、画像も充実している。米国ではNSFのPEETプロジェクト（Partnerships for enhancing expertise in taxonomy）といった国の予算支援もあり、幾つかホームページ上での大規模なレヴィジョン公開がなされている。Ashe氏の中北米のハネカクシ類のまとめ（<http://ron.nhm.ikans.edu/ksemi/peet/peet1.htm>）や、スミソニアン博物館のノミハムシ類のサイト（<http://www2.sel. barc.usda.gov/Coleoptera/Flaabeetles/Flaas.htm>）はきれいな画像が次々と現れ、見ているだけでも飽きないすばらしい出来である。

インターネットの利用が分類学にとって当然の道具となってくると、ホームページを開設するのは分類研究者の義務となってくる。分類学者は論文をペーパーに発表するだけのスタイルから、ホームページ用の発表も踏まえた研究スタイルに変更を強いられることとなるだろう。

ワープロで書いている文章は、すでに電子化されているのでネットにのせるのは簡単だ。大きな違い（進歩）はカラー画像の利用だろう。今までは印刷経費から白黒写真に限られていたものが、ただ同然でカラーが公開できる。線のスケッチと共に公開されれば分類学的情報は飛躍的に



日本産アリ類
カラー画像データベース

日本産アリ類
カラー画像データベースへようこそ！



● **利用案内**

まえがき、データベースの利用と著作権、使い方、CD-ROM頒布のご案内

● **アリ学入門**

学術の発展促進「アリ」むとありあがり昆虫の顔「アリ」：田嶋輝雄

● **日本産アリ類の分類**

日本のアリ：日本のアリ：福研究資料

● **アリの固定と検索**

イメージ検索、形態二分岐検索、地理別検索、種検索、属検索

● **本プロジェクトについて**

日本産アリ類の分類学の現状とタイプ標本の画像：21世紀の基礎生物学への挑戦：
生命科学課程の虫類データベース化とその意義：Ant Exhibition at Harvard University：
Ant Exhibition at Museum of Natural History Vienna：デジタルカラー標本の作成法：
ユニバーシティ・オブ・ミネソタの支援について：関係者一覧

● **関連情報**

利用状況、関連するサイト

目次	日本産アリ類カラー画像データベース	索引
----	-------------------	----

日本産アリ類検索キー：[F----05]

検索キー：アリ科 [05]

キー検索経路：アリ科/アリ科 [05]

アリ科 [06]	アリ科 [07]
<p>触覚の挿入部は多くの場合額隆起線によって多少なりとも覆われている（図2.6）；触角挿入部が突出している場合は前伸腹節刺がある</p> <p>図 2.6. 雄頭（トビイロシワアリ）</p>	<p>額隆起線の有無にかかわらず、触角の挿入部は完全に露出している（図2.9、2.10）；前伸腹節刺はない</p> <p>図 2.9. 顎部。a：ヒメサスライアリ属の一種、b：ヤマトムカシアリ</p> <p>図 2.10. 顎部。a：ヤマトムカシアリ、b：ジョズファンアリ属の一種</p>

日本アリ類データベース作成グループ Copyright 1995-1998

ant@dna.affrc.go.jp

図1 日本産アリ類カラー画像データベース (<http://www.dna.affrc.go.jp/htdocs/Ant.WWW/INDEX.HTM>より)

増加する。また、引用文献も（著作権のきれたものなどは）、スキナーによる画像取り込みを行ない全文を公開すると、次世代の分類研究者は文献探して研究時間の多くを割かれなくてすむ。インターネットは人類の遺産を利用する方法として、なんとも優れている。

インターネットの利点・欠点

電子化された情報はZORAののって世界中を瞬時に駆け巡り、その情報は専門家だけではなく一般の人々でも容易に手に入れることができる開かれたものとなる。研究者にとってはリアルタイムの情報の交換と共有の場がもたらされる。分類学、あるいは科学全体をも変える可能性をもっているインターネットは多くの利点をもつが、その欠点も十分に考慮に入れなければならない。

まず、インターネットが接続されていない国々、地域との格差が広がるため、印刷物やCD-ROMの同時公開など、それを補う手段が必要であろう。電子情報の限界も知るべきである。情報の破壊はウイルスや物理的なハードの故障で起こりうるし、混乱を招くことを意図したノイズも免れない。また大切なこととして、「実物」、分類学では「標本」には、重さ、臭い、質感があり、さまざまな角度からの肉眼による観察や、さらに解剖さえもできる。しかし、コンピュータ画像にはそれが無い。画面を見てわかった気になってしまふのは恐ろしい。

将来へ向けて

昨年の八月、インドネシアのスマトラを訪ねた。私の専門のエンマムシ（図2）を採集してきたが、そのうち半分も名前がついていないだろう。日本のエンマムシがやっと整理がついた程度の解明度だから、インドネシアのものの名前調べはあと十年はかかるだろう。さっそく標本を調べて名前をつけたいのだが、古い文献探しに追われるレベルだ。顕微鏡の横のコンピュータから「エンマムシ・データベース」が現れ、すべてを教えてくれるにはまだほど遠い。現在世界で十人の現役エンマムシ研究者が協力して、データベースの構築をするしか方法はないのだろう。次世代のために。

名前のないものは認識できないし、護ることもできない。生物多様性の危機はそういうところにある。「次世代の天文学者に研究すべき星はまだ輝いているだろう。しかし次世代の生物学者に研究材料はあるかどうかわからない」（C. D. 序文より）。分類学の発展は地球を救うと多くの生物学者は考えている。（北海道大学農学部助手）



図2 インドナガエンマムシ
(大原原図)

ネットワーク型読者環境の誕生

濱 森 太 郎

不況のニュースが相次ぐ出版界で、インターネット・マガジン『まぐまぐ』の健闘振りが伝えられている。この健闘中の『まぐまぐ』は、「まぐまぐホームページ」上の窓口に設けられた各雑誌発行所（サイト）にEメール・アドレスを登録し、サイトを運営する各発行者がEメール書式で雑誌を発行・配達する仕組みである。

各発行者が『まぐまぐ』に雑誌受付窓口を登録し、「窓口」の運用を委託するため、発行者が支払う登録・運営料は有料ながら、利用者の登録・利用料は無料である。各サイトが読者数を公表し、読者数に応じた単価で広告を募集しているところを見ると、おそらく繁華なサイトでは、広告料収入が運営費の一部に当てられていることと推測される。

『まぐまぐ』の一九九九年一月現在の総読者登録数は、八〇〇万件。登録件数一万件で開業した一九九七年一月から一九九九年一月現在まで二年間で、実に八〇〇倍の増加振りである。

そこでこの『まぐまぐ』の急成長を追体験すべく、一九九七年九月、私が所属する「三重大学近世文化研究会」で「学内LANを利用した授業用ネットワーク・サイトの構築計画」という名称の研究計画を立て、一九九八年一月、共通教育授業用のホームページ『奥の細道』スタディー」を立ち上げてみた。『奥の細道』の地図、原文（素龍本）、語注、訳文、解説、『随行日記』、『曾良書留』、『奥の細道』関連リンク集がそのホームページの主なメニューである。

もともと調査目的のホームページだったために、開設日から助走期間にあたる一九九八年九月までのアクセス状況を記録して集計することにした。その集計の結果を簡略に言えば、九ヶ月間の総ヒット件数は二五、四〇五件、研究・教育関係のヒット件数は三、六〇八件となった（十月・十一月以後は、月間のヒット件数が一万件を越えたので、集計作業を中止した）。これらの利用者は、知名度の低いサイトを検出し、早期にアクセスを開始したネットワーク人種と見られる。この利用者を研究・教育関係者に限って上

位十位まで、組織名・ヒット数の形で掲げると、次のようになる。

・ Karolin Gaspar Protestant University (五二一件) ・ 奈良先端科学技術大学 (四四六件) ・ 大阪市立大学 (四四四件) ・ 東京大学 (二四四件) ・ 東北大学 (二四七件) ・ 愛媛大学 (九八件) ・ 奈良国立文化財研究所 (八一件) ・ 早稲田大学 (七九件) ・ 静岡大学 (七七件) ・ SoiteECHO (六九件)

この「授業用ホームページ」の開設の経緯は、『まぐまぐ』の流行現象に便乗したのだから、格別大きな意味はないが、その間に研究会が確保した技術には、大きな意味がある。その間に私たちは部品単価を切り下げ、二十万円少々で比較的安定したサーバー・システムを数機、立ち上げたからである。

とかく流行を軽視する態度は、私たち大学人共通の性癖だが、しかしネットワーク社会の中では、社会変化の大部分を「流行」として一括する態度には疑問符が付く。犬年齢(犬の一年は人間の七年に相当する)と呼ばれるネットワーク社会の社会変化は、技術革新と一対の形で進行するために、「流行」を見過ごすことが「技術停滞」に直結するからである。

ネットワーク社会の中の大学出版会には、『まぐまぐ』に似た「学術情報発信業」の性格が求められる。当然、便利で合理的で安価なネットワーク技術の導入は欠かせない

準備である。既存の大学出版会も運営面では従来以上にネットワーク型の組織運営を志向するだろう。『まぐまぐ』の受信者たちのように、情報受信者たる読者が書物とネットワークという二方向性の受信準備を整えているからである。学術研究の成果を広く社会に還元することを使命とする大学出版会の立場からすれば、私の著作よりはネットワーク上の「奥の細道」スタディーの方が遙かに短時間にその使命を全うする時代がやってきたのである。

映画『山猫』の中でバート・ランカスター演ずる老貴族が民主主義社会の到来に直面して独白する科白がある。「We must change to remain the same (我々は変化しなければならぬ。今後も同じ我々であり続けるために)」。さて我々もそろそろ重い腰を上げて、『遠い太鼓』(村上春樹著)の鼓動を聞こうではないか。(三重大学出版会理事)

大学出版部と母体大学との関係

— 続・岐路に立つ大学出版部

渡辺 勲

1 アメリカカ大学出版部協会、十年前の「現実」

A A U P 総会を取材した *Publishers Weekly* (一九八八年九月二三日号) の掲載記事の紹介から始める。因みに、この年の総会テーマは “A Changing Role” であったが、「大学出版部とは何か?」を考える上で実に興味深い内容なのだ。はじめに記者は、「各大学出版部の間での合意点が無かったことだけは、今年唯一、意見の一致をみた点だった。現在の大学出版部は目的に向って懸命に邁進している……が、個々の出版部の使命は多様化している。昨年、総会では華々しい議論が交わされ、A A U P や個々の出版部の使命については様々な意見があったが、今年の総会では『A A U P の傘下』を強調しながらも、各々の個性を貫く姿勢が感じられた」と総会の支配的空氣に触れ、そして次のように語り始める。

①「一九六〇年代は大学出版部にとって黄金時代だった。ソ連の科学技術の進歩を危惧した連邦政府は、ニューフロンティアと偉大な社会を目指すことと歩調を合わせ補助金を簡単に出した。七〇年代、ヴェトナム戦争の終結とともに政府の補助金政策も変わった。補助金獲得は大きな問題

であり、補助金の削減が出版部の活動や出版内容にどういう影響を及ぼすか不安にかられた時代であった。……八〇年代後半レーガン政権下の現実路線を背景にした公的補助金の削減、商業出版社の巨大化、大学出版部の世代交替などによって必要となった出版部の財政再建の具体的戦略が今までの伝統的使命感を押し退けている、と見る人は多い。A A U P 会長は、自分達の使命は最良の学術書を効率良く出版することにあるとする一方で、学術の概念を拡大し、人間理解に貢献する出版という大学出版部の使命には基本的には変化はない、と主張する。……「しかし」、

②「大学出版部の役割は変わった。我々の最大の使命は本来、これから五十年も生命を保ち続けるような偉大な学術書を出すことであり、第二に五年から十年重要であり続ける本を出版することだが、学問領域の専門化と図書館予算の削減に伴う売上げの減少で、これも難しくなってきた。……しかし、商業出版社がどんどん巨大化してきた今、第三の道が開けてきた。学者や研究者以外の知的読者の待っている本がたくさんあるはずだからである。」

③「七〇年代の財政危機のおかげで大学出版部はビジネ

スとしての出版に目覚めたが、その改革の一環として企画決定の変化がある。それまでは学術的価値が検討の中心であったが、その後は社会的役割に目を向け始めた。」

④「思いがけないベストセラーで大学出版部は、経済的メリットも受けるし名前を売ることも出来る。しかし、大量部数の一般書の出版には大学出版部の分野でもないのに商業出版の領域に踏み込んで、と非難される以外にもリスクを伴う。インディアナUPは八万部売れた全米バスケット・チャンピオンの本について『これは大きな収入をもたらしたが、これに費やしたエネルギーと時間を思うと落ちつかないものだ』と語り、またカリフォルニアUPの財政部長は、イラスト入りの古典文学書の出版で大成功を収めたことを思い出しながら『これは我々にとって良い体験だったが、経済的負担も大きかった。コストがかかる本で、大学から借金したが発売前に利息を払わされる始末だった。それに書店には通常より低い掛けで卸さねばならなかったし、実質収入は期待した程ではなかった。』」

⑤「我々は自分自身の意見を持った著者（による『問題の書』）を求めている。……『問題の書』が出版されにくいのは、学問水準を審査するという手続き上の問題と理事会制度のためだ。こういう本はこの審査システムに馴染まない。こういう本の企画を出す編集者は、余程やる気を出して頑張らないと審査段階でボツになるだろう。」

⑥「全ての大学出版部にとって出版内容の如何を問わず

重要な問題は、いかにして補助金を継続的に獲得するかである。六〇年代末、ワシントンUPの予算の三分の一は大学からの補助金だったが、今はわずかに5%になった。州立大学出版部の幾つかは、大学そのものが財政的危機のため、出版部にまで補助金申請のチャンスが回ってこない。」

最後に、記者は次のような「まとめ」で記事を終える。「現在、大学出版部は補助金問題などを抱えているが、多様化のうちにも発展している。商業出版の世界が益々巨大化したため、商業出版が出来なくなりつつある著者との緊密かつ継続的接触を大学出版部は保てるのだ。大学出版部の伝統的スタイルを変えようとするのが話題になっているが、これは健康体である証拠だし積極的姿勢でもある。」

十年前のAAUPの現実を反映している「記事①」⑥の「一つ一つに、私なりのコメントを付すべきであるが、その紙幅がない。いまは、AAUP傘下出版部の苦闘の軌跡を、母体大学・補助金・著者・学問・商業出版等との関係性で考えている」と記すにとどめ、AAUP十年後の「現実」を見つめることにしたい。

2 AAUPの一九九七年度「経営分析」

多様性を含み込んだAAUPだが、傘下一一〇出版部の唯一の共通点は「出版部は大学（研究所）機構の一部（内部組織）」ということである。そこが同じく多様とは言いながらも、学校法人・財団法人・株式会社等からなる我々AJUPとは違う。彼らにとっての母体大学は、我々にとっ

	Iグループ (23出版部)	IIグループ (15出版部)	IIIグループ (15出版部)	IVグループ (8出版部)	計(平均) (61出版部)	東大出版会に 当てはめた数値
基準売上額(100万ドル)	～1.5	1.5～3	3～6	6～		
平均売上額(100万ドル)	0.9	2.0	4.0	14.0	3.6	20.5億円(純売上)
出版点数	34	72	115	227	85	187
正職員数	12.8	24.1	37.1	96.7	32.6	62

指数表現した「損益」状況

総売上	117.6	118.6	118.9	120.5	119.9	122.6
総返品	17.6	18.6	18.9	20.5	19.9	22.6
純売上	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
売上原価(編集費含まず)	51.7	48.0	42.5	44.5	45.1	42.2
粗利	48.3	52.0	57.5	55.5	54.9	57.8
雑収入	1.5	3.3	2.0	4.7	3.5	2.2
売上利益	49.8	55.3	59.5	60.2	58.4	60.0
総経費(編集費を含む)	89.0	78.9	70.2	63.8	70.0	63.3
営業損益	-39.2	-23.6	-10.7	-3.6	-11.6	-3.3
大学の援助	33.9	16.5	4.8	0.7	7.4	0.0
助成金	6.1	4.0	3.9	2.8	2.8	2.0
以上計	40.0	20.5	8.7	3.5	10.2	2.0
経常損益	0.8	-3.1	-2.0	-0.1	-1.4	-1.3

「母体大学からの援助」の具体的内容(各数字は該当出版部)

回答出版部	22	15	12	4	53	東大出版会の場合
直接的運営助成	20	13	8	1	42	1)
事務所の提供	17	9	8	2	36	有料
倉庫の提供	8	4	5	1	18	有料
貸付利息の免除	10	5	7	2	24	無
大学による経理事務	15	9	7	2	33	無
在庫維持費の免除	7	2	4		13	無
売掛回収費の免除	9	1	4		14	無
法務費用の免除	18	11	9	4	42	2)
監査費用の免除	17	10	7	2	36	3)
光熱費の免除	17	8	6	1	32	有料
電話代の免除	1				1	有料
保険料の免除	13	5	2	3	23	無
人件費(大学の全面負担)	3				3	無
(一部負担)	11	4	4		19	無
社会保険料(大学の全面負担)	4	1			5	無
(一部負担)	11	6	3		20	無
駐車場使用料の免除	6	1	2		9	4)
大学からの人材派遣	19	11	7	3	40	5)
その他			1	1	2	無

「東大出版会の場合」の注記

- 1) 理事会(年9回、評議員会(年1回))の運営にはかなりの経費を要するが、独立した財団法人としての行為であり、援助があるはずもない。
- 2) 法学部選出理事にいろいろとお教えをいただくことはある。
- 3) 理事会のもとに監事2名が選出されている。一人は法学部または経済学部の教授、一人は事務局長。評議員会での監査報告をお願いしているが、監査実務は別途に監査法人と契約している。

て以上に、大事な・重い存在、そして厄介な存在なのだ。コロンビアUPのストラチャン局長が「大学にとって出版部は出来の悪い養子のようなもの、……大学から金を借りることもあるが銀行より金利が高くてね」と語ったことを思い出す、ハーバード大学本体がマネーゲームに興じて巨額の資金を失ったとの記事（「ハーバード大も大損——七月以降13億ドル」『朝日』98・10・26）を引くまでもなく、彼らと我々との「環境差」には注意を怠ってはならない。しかし、大学と出版部とは（たとい大学の一部との位置付けを与えられた出版部でも）、本質的に違う組織であることに彼我の差はない。つまり大学は研究・教育組織であり、出版部は「本」を生産し販売する（出版）組織である。この「出版」が大学の意思に完全に従属し学内需要のみに対応している限りは（それは厳密にはpublishingではない）両者の本質的差異は顕在化しないが、読者を求めて学外にはみ出していかざるを得ない「本」の本性は、絶えず両者間の矛盾の顕在化を促迫する。換言すれば、大学「経営」の論理で出版「経営」を取り込むことはもともと不可能であって、出版経営の成長は大学からの自立を必然化する、ということである。

以上のような認識を前提として、先の「表」（一九九七年の現実を反映）を見ていただきたい。これは、AAUP本部が傘下出版部に関する膨大かつ詳細なアンケート調査（回答率55%）分析表のほんの一部だが、大学出版部と母

体大学との「一つの関係」を實に見事に表現していると思うのである（「小会の場合」を比較事例として付す）。注意深く見れば分かることだが、大学出版部の「成長・発展」とは、客観的には母体大学からの自立を意味している。裏返せば、それ以前の成長？段階にある出版部は「母体大学の援助」なくしては、少なくともアメリカでは存在し得ない、ということである。「収益事業の一環として出版部を位置付ける」等という発想が母体大学にある筈はないが、出版部を重い荷物と考える傾向は否定出来ないようだ。母体大学にとって大学出版部とは如何なる存在なのか？このことは、我々AAJUP傘下の出版部にとっても、我々の将来がかかった大きな問題ではないだろうか。

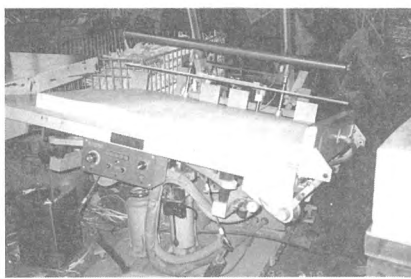
3 小さなまとめ

AJUPは今、少なくとも組織的には発展しつつある。ここ数年でいくつもの出版部を新会員として迎え入れることができたし、さらにいくつかの大学では出版部創設の動きがある、と聞く。しかし一方で、伝統的な加盟出版部からの「存続の危機」の声も耳にする。これらのことは全て、母体大学の変化（余儀なくされたそれであるか、選択した結果であるかともかく）に起因しているのではないか。大学出版部の個性化と固有の使命を現実化するには、今こそ出版組織らしい自己主張をきっちりと踏まえた、母体大学との新たな関係作りが決定的に重要であると、私は思う。

（東京大学出版会常務理事）

歩く・見る・聞く
知の
 ネットワーク 14

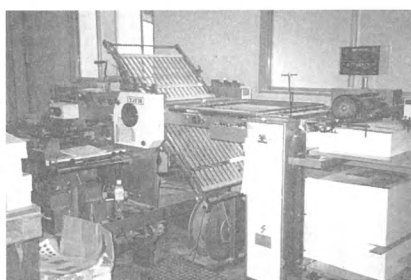
製本所に行く



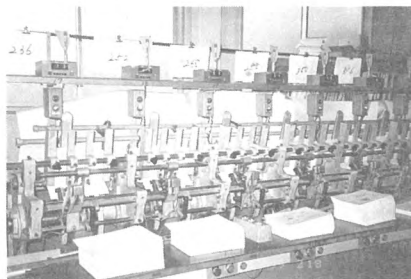
そろえる—自動紙突きそろえ機



断つ—刷本の裁ち割り作業



折る—バックル型紙折機⁽²⁾



丁合—自動丁合機

ひさしぶりに製本所へ新刊検品に出かけた。見本が仕上がるまで本製本の工程を見学することにした。

まず、製本所では製本する前に刷本と付物の確認が行われる。次に突きそろえと裁ち割り、折りが行われる。

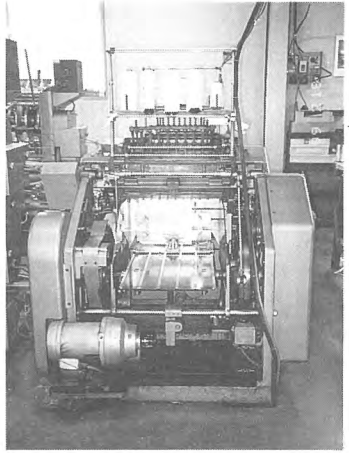
折り方には、まわし折り、巻き折り、経本折り、観音折りがあがるが、まわし折りが一般的である。機械折りでは、上質紙の

場合、B6・四六判、一時間九〇〇枚、A5・八〇〇枚、B5・七〇〇枚、アート・コートでは各々七〇〇、六〇〇、五〇〇枚、折ることができるという。

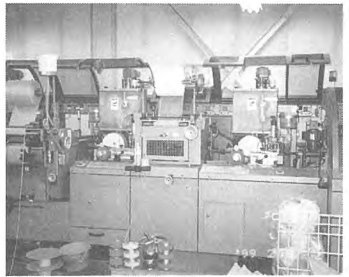
折りが終わると、丁合と仕上げの本製本ラインにつながる。丁合からラインの終わりまでの長さは約四〇メートルにもなる。

製本工程⁽¹⁾

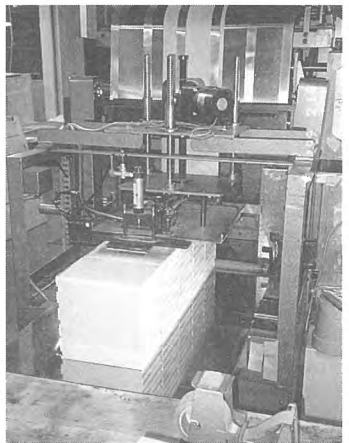
本製本	仮製本
突きそろえ	突きそろえ
一部抜き	一部抜き
裁ち割り	裁ち割り
付物断裁	付物断裁
折り	折り
貼込み	貼込み
丁合	丁合
かがり	とじ
ならし	—
下固め	—
仕上げ裁ち	—
丸味出し	—
バックキング	—
本固め	くるみ
表紙つけ	仕上げ裁ち
仕上げ	仕上げ



かがる一自動糸かがり機



ならず、締める一本製本ライン



仕上げるートライオート

この工場には、本製本の自動丁合機が二ライン、仮製本が一ラインある。本製本の丁合は二四駒(二四台)、仮製本は三〇駒(三〇台)で、それ以上は合わせ丁合になる。本製本で時間二〇〇〇冊、仮製本では五〇〇〇〜八〇〇〇冊をこなすという。その丁合機の横に自動糸かがり機がある。かがりは、一台で時間当り四千回、計算すると $4000 \text{回} \div (1 \text{冊} \div 1 \text{回}) = 4000 \text{冊} / \text{台} / \text{時間}$ である。一六〇頁の本だと、 $4000 \div (10 \div 1) = 363 \text{冊} / \text{台}$ という計算になる。括弧の中の+1は、糸切り、一回くるりと空回りで切るので台数+1になるのだという。

丁合を終えた折本はコンベアに乗り、そろえ、ならし、塗布、乾燥、三方化粧裁ち、丸み出し、バックキング、寒冷紗、背貼り紙と花布貼り、表紙をくるみ、いちようを入れ、締め付けられ完成された本に仕上げられる。本製本ラインでは、時間当り二〇〇〇冊、仮製本では時間五〇〇〇〜八〇〇〇冊まで仕上げが可能だという。ラインのお値段は、本製本で五億円、仮製本

で二億円するそうである。

ライン機械の最後尾にはカバリーや帯掛け、スリップ、ハガキ投げ込み、梱包までを自動で行うトライオートがセットされている。トライオートを使えば時間で二四〇〇冊が出来上がる。

ここ十数年で製本も省力化、能率化が進んだ。近い将来組版、印刷からのデータの共有化が製本工程まで進み、より効率化されるだろう。そのころ編集作業の効率化はどこまで進んでいるだろうか。偶には製本所でも覗いて下さい。

* * *

(1) 本製本(上製)と仮製本(並製)の工程の違いは、上製は中身を仕上げ裁ちしてから表紙を包む、並製は表紙を包んだ後に仕上げ裁ちを行う。

(2) 折機には、バックル型折機とナイフ型折機、コンビネーション型折機がある。

(東海大学出版会・稲英史)

北海道大学図書刊行会

▼田中一著『さよなら古い講義』（四六判・一八〇〇円）質問書方式による会話型教育法への招待。これにより、①私語がなくなり、②学生の思考力、理解力が高まり、③文系大学で不確定性原理の講義が成功した、ことなどが明らかにされる。小・中・高の授業、会社の研修でも使える。▼栗山浩一著『環境の価値と評価手法』（A5判・四七〇〇円）生態系破壊の損害を金額で評価するCVM（仮想評価法）の理論的背景の検討とわが国の湿原や河川生態系を対象とした実証分析に基づき、新たな生態系保全政策を提唱。▼高見勝利編『人権論の新展開』（A5判・四八〇〇円）▼瀬川信久編『私法学の再構築』（A5判・六〇〇〇円）北大法学部創基五十周年記念出版。北大法学部の教授・助教授を中心とする執筆陣が、最先端の研究から古典的命題の再検討まで日頃の研鑽成果を書き下ろした論文集。▼中浦皓至著『日本スキー・もうひとつの源流』（A5判・三五〇〇円）レルヒ中佐による旭川第七師団でのスキー講習を契機とする北海道スキーの誕生過程を、未発掘資料を駆使して解明。

聖学院大学出版会

▼エーミル・ブルンナー『正義——社会秩序の基本原理』（寺脇不信訳、五八〇〇円、A5判、四三六頁）

社会主義体制の崩壊は、世界の市場経済体制化という社会構造の変動をもたらした。現代世界では、経済原理の優先によって、人権は侵害され、また国家や社会の枠組みも揺らぎはじめている。しかも現代では社会を批判する原理も見失われている。それでは二十一世紀に向けて市場経済原理ではないとすると、何によって正しい社会秩序を形成できるのか。人権は何によって基礎づけられ、いかに保障されるのか。個人々が孤立し政治的無関心が蔓延している中で政治的公正を実現するために、なにが考えられなければならないか。

本書は、一九四三年に出版されたものであるが、このような現代の課題にも応える基本原理、つまり法・経済・国家・家族・国際関係などを秩序づけている基本原理を提示している。

著者はスイスのチューリヒ大学で神学・社会倫理を教え、戦後国際キリスト教大で教えたこともある神学者である。

慶應義塾大学出版会

▼『ビット産業社会における情報化と都市の将来』（伊藤滋監修、光多長温・日端康雄編著、一五〇〇円）は、情報化の進展による国土の変貌と情報化時代の地域振興の条件について、思い切った将来像を描く。▼『グループ・インタビュの技法』（S・ヴォー他著、井下理監訳、田部井潤・柴原宜幸訳、二六〇〇円）は、教育学・心理学・マーケティング・コミュニケーション等への応用について解説する。米国で実績・定評のある良書の完訳。▼『福澤論の百年』（K・U・P選書）（西川俊作・松崎欣一編、二二〇〇円）は、『三田評論』に掲載された福澤論から、出色の評論、異色のエッセイ、近年の福澤論の傾向を窺わせる座談を収録。慶應義塾『三田評論』創刊百年記念出版。▼『女？ 日本？ 美？——新たなジェンダー批評に向けて』（熊倉敬聡・千野香織編著、二五〇〇円）は、『芸術』のジェンダー化、政治化の視点から、「女」「日本」「美」をめぐる言説とその背景にある権力を問い直し、新たなジェンダー批評の理論と実践の可能性を拓く論集。

産能大学出版部

『起業の心得―めざせ日本のビル・ゲイツ―』松井利夫著（一六〇〇円）
一九八〇年初めのアメリカで、五〇〇万人の失業者が出たとき、中小のベンチャー企業がこれを吸収してアメリカの経済を蘇らせた。

今日の日本経済に活路を見い出し、経済の再生・活性化をはかるためにベンチャー型のアントレプレナー（起業家）の出現が切に求められている。

本書は、四畳半一間に製図版二枚から創業した著者が、株式公開をはたすまでの、実体験をもとに、起業の心得・起業家の資質について述べたものである。

一〇〇人には一〇〇の顔があるように、経営にもそれぞれのやり方があるが、著者の提唱する「経営者学」は、志・情報（知識）・創造（知恵）・実践（行動）が成果となり、評価となって達成されるにはどうしたらよいかを具体的に述べている。

知恵や勇気の大切なこと、戒めなど経営者として体験したものを若き起業家に伝えたいという使命から著者の熱い思いを述べたものである。

専修大学出版局

▼坂詰智美著『江戸城下町における「水支配」』（四五〇〇円）水は、人間が生きることを営むうえで、基本のものである。古来より水を制する者がその社会を治めてきた。水については上水、下水、堀、河川等があって、近世の水研究は封建社会が水田耕作を中心とした農業を基幹としていたため、治水史の側面が強いのであるが、本書は江戸城下町を流れる河川の管理がどのようになされてきたかについてまとめたものである。

管理のための幕府職制のうち、特に道奉行、町奉行、本所奉行、普請奉行らの職制、幕府内の位置付け等を考察している。終章では、環境法制史的な視点から塵芥処理と尿尿処理の問題にまで論考を及ぼしている。

▼石巻専修大学開放センター編『夢と遊びごろ』（二四〇〇円）地域市民に開かれた講座として第8回を数え、本としてもシリーズ3巻目になる。

混沌の時代に潤いをもたらす「夢と遊びごろ」をテーマに、「自然への好奇心」「大学の夢」「プレイメカトロニクス」「夢と眠りと脳」など14編。

玉川大学出版部

▼大学が辿ってきた歴史を細くことからその本質をあぶり出した秀作二点。羽田貴史著『戦後大学改革』（四五〇〇円）は、大学自治の制度化、一般教育の導入、大学の地域的配置の計画的統制など、戦後六〇年代に至るまでの大学諸政策の意義を、史料を駆使して解明する。伊藤彰浩著『戦間期日本の高等教育』（六二〇〇円）は、大学昇格や「知識階級」の就職難、学校騒動など諸問題が噴出し、顕著な量的拡大を遂げた高等教育大変動期を描く。

▼変革期にある日本の大学が、高等教育先進国アメリカから学ぶべき点が多い。喜多村和之著『現代の大学・高等教育―教育の制度と機能―』（四五〇〇円）は、日米比較の視点から、制度的概念・システム論・教育機能・大学評価などの問題を取り上げる。現代高等教育論の決定版E・アシュビー著／宮田敏近訳『誰でも何でも学べる大学』（二四〇〇円）は、イギリス大学人の立場からアメリカ高等教育を論じた古典的名著。万人に開かれた大学における学生・教師、教育と研究のあり方を語る。

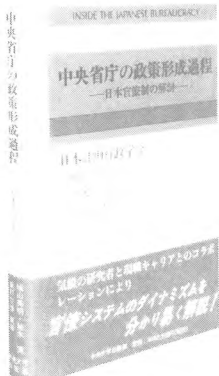
中央大学出版部

▼城山英明・鈴木寛・細野助博編著

『中央省庁の政策形成過程―日本官僚制の解剖―』（二六、〇〇円）

中央省庁の意志決定がどのような多元性、動態性をもっているかを、主な省庁の起家から行政活動執行までの一連のプロセスを具体的に記述することで明らかにしようとしている。本書の独自性として、従来ブラックボックス化してきた省庁内部の意志決定プロセスを明示化する初の試みであること。研究者と各省庁の第一線で働いているキャリア官僚との共同研究のため実証性の高い研究成果が実現できたこと、の二点が挙げられる。

特に行政改革への取り組みについての政策形成過程の紹介などは、ドキュメントとしても面白く、一般にも興味深いものになっている。



東海大学出版会

▼図研究会『図・建築表現の手法』

本書は、大学での建築設計教育において、その基礎的部分である建築設計図面等の描き方（表現手法）等を、はじめて学ぶ人が簡単に理解できるように、欧米および日本建築の巨匠たちの作品（ミース、コルビュジエ、アーキグラム、清家清、磯崎新）を参考にわかりやすく解説する。内容・配置図・平面図・立面図・断面図・アクソメなど



東京大学出版会

バブル崩壊後久しく、日本経済は低迷をつづけている。世の中は「景気の回復」の合唱であふれている。折しも「春闘」の季節、それもまもなく「死語」になるかもしれない。多くのわが国の給料生活者にとってもはや右肩上がりの収入は今は望むべくもないのだろうか。では、この国の社会保障―年金、保険、医療等の財源はどうなるのだろうか。

▼『先進諸国の社会保障』（全7巻）の刊行を開始した。①イギリス、②ニュージーランド・オーストラリア、③カナダ、④ドイツ、⑤スウェーデン、⑥フランス、⑦アメリカ。各巻とも、第1部「社会保障の背景」、第2部「所得保障」、第3部「医療保障と社会サービス」、第4部「社会保障改革の動向」と目次をそろえ、本年中に完結する予定である。（①～④各五二〇〇円）

二十一世紀を目前にして、社会保障制度の見直しが迫られている時に、先進諸外国のあゆみと最新の動向を知ることが、わが国のゆくえを占ううえでも必要なことであろう。気鋭の研究者が全国から集まり、このシリーズが編まれたことは、時宜に適った試みであると思っている。

東京電機大学出版局

先の大戦におけるソ連軍戦車T34は、その活躍振りに比べて中の狭隘さで悪名高かった。しかも床は固定のまま砲塔だけが回転したから、砲手はアクロバットさながらの次発装填を強いられた。ライバルの独軍戦車とは雲泥の乗り心地だったとか。これは即ち人間工学の有無を意味する。勝敗の問題ではない。



『看護動作を助ける
基礎人間工学』

本体 2800円(税別)
A 5判・240頁

高齢社会を迎え、老人が老人を介護する状況が実際に現れた。介護者の方が無理な動きで身体を痛めてしまう例もある。英国では介護動作に関する諸規則が社会に浸透し、そんな例が激減したという。本書はその辺りの話題にも触れながら、イラストを上手く使って、人間工学の基本的考えから応用までを解説する。人を大切にする国や社会は、やがて尊敬と賞賛を勝ち取るだろう。

東京農業大学出版会

▼武田正久『東京農業大学醸造科学科と酒づくりのはなし』

お酒づくりというと、いい環境で、いい水で、よい米で、そして職人的な杜氏(とうじ)さんの腕によって造られる、たいへんロマンのある仕事ではないかと思われます。しかし、著者は、そのような点にとらわれることなく、科学的な分析によって酒づくりを客観視しているのです。例えば、水の問題。よい水、おいしい水を使えば、おいしい酒が出来るかというところ、そうではないと指摘します。おいしい水を使えばおいしい酒は出来るでしょうが、名水といわれるようなおいしい水でなくても、同じようにおいしい酒は出来る。これは科学的な事実であるといえます。

本書は、著者が学生の教材用として書いたものです。数々のお酒の開発を手がけてきた著者が、科学的な根拠なしに、ロマンとして扱われてきた酒づくりの闇に科学の光を当ててみるものでもあります。

法政大学出版局

▼ギュスターヴ・フロベール著
斎藤昌三訳(叢書・ウニベルシタス618)
『フロベールのエジプト』……三五〇〇円

『読實新聞評(一月二四日)』より抄録
フロベールは一八四九年から一年半をかけて中近東を旅行した。本書はそのうちのエジプト旅行記で、削除なしの完全版の初の全訳。帰国後、五年をかけて彼は『ボヴァリー夫人』を書き上げるが、それに先立つオリエント旅行記は、十代なかばから十年以上の長い習作の時期を経て、フロベールが作家としての出発を遂げた作品と考えられており、貴重な文献学上の資料でもある。

しかし、それ以上に旅行記としても本当に面白い。エジプトの強烈な光や砂漠の嵐、エキゾチックな踊りや食物の匂いが感じられるような紀行文になっていて、思わず引き込まれてしまう。

未知の国で未知の文化に肌で触れた驚きが、全篇にみなぎっている。それは異質なものととの出会いや価値の多様性を重んじる今日的な多文化主義(マルチカルチュラリズム)と通じるものでもあるのだろう。

評者・城戸朱理氏(詩人)

放送大学教育振興会

▼放送大学では二十一世紀のあるべき放送授業の姿を目指して、平成十一年度より「基幹科目」と「主題科目」を開設することとなりました。それぞれの科目の目的は次のとおりです。

基幹科目：従来の専門分野にとらわれず現代社会の基本的な課題について考え、それを追究するための幅広く深い教養と総合的な判断力を養うとともに、問題の所在とその探究の方法を考える手掛かりを与えること。

主題科目：各専門分野を横断する今日的な主題について、課題の認識、理論の理解など、課題解決のための学際的・総合的知見と思考力の涵養を図ること。

▼初年度に開設される基幹科目と主題科目は、それぞれ「現代日本の地方自治」「現代日本の教育課題」「日本の自然」と「地球環境を考える」(いずれも平成十一年三月刊行予定)。

▼放送大学印刷教材の編集・発行が放送大学教育振興会の大きな業務の一つである。平成十一年度の新刊は七十一号、放送大学の第一学期に開設される科目は、三〇八科目。

明星大学出版部

▼神辺靖光著『教育史散策』。四十年余の教育史研究とともに、中・高・大学で教鞭をとってきた筆者の、世に訴えようとする思いをまとめた珠玉の書。

大学院在籍中、学資を得るために杉並区にあった私立城石中学・高等学校の講師となった筆者は、戦後のアメリカ化一辺倒の時流の中で、威武に屈することなく、孔孟の道を説いた河野通彌太校長に傾倒。河野校長との明治の私塾・私学の反骨、独立精神についての談論が、生涯をかけた教育史研究の端緒となる。昭和四十二年、大学教員のまま財団法人日本私学教育研究所の兼任研究員となり、教育史研究の中で最も手薄だった中等教育史を専攻。昭和戦前期の旧制中学校を舞台としたドラマ「はっさい先生」(NHK放映)の監修者となって全国に紹介される。なお、私立東京文化高等学校の主事として、卒業生や父母を前にした講演や朝礼での訓話、私立中学・高等学校教員のための講演「中等教育史と慶應義塾」「近代日本の学校と私学」も収録。日本の教育を知るうえに手軽な書になっている。

早稲田大学出版部

▼『産業社会の発展と議会政治―一八世紀イギリス史』(松園伸、三六〇〇円)

富の裏側に潜む腐敗と墮落。産業社会が発展するなかで、新しい政党政治が誕生し変貌する過程をつぶさにあとづける。

▼(シリーズ高齢社会とエイジング(全8巻)第六・七回配本、⑧『エイジングの政治学』内田満・岩淵勝好、二六〇〇円)、⑤『高齢者のライフスタイル』(嵯峨座晴夫、二七〇〇円)「国際高齢者年」におくる必読書。

▼『オーウェル時代を超える精神』(奥山康治、四〇〇〇円) 没後五〇年近くを経たいまも、読者を獲得し続けるジョージ・オーウェル。その全体像を時代背景とともに浮彫りにする。既刊「ジョージ・オーウェル」(同前、三五〇〇円)。



名古屋大学出版会

- ▼岡本隆司著『近代中国と海関』（九五〇〇円）中国と西洋の交渉の場であった海関制度を軸として、一六世紀末から二〇世紀初にわたる中国の国家構造とその変遷を、西洋近代モデルによる枠組と通説を批判しつつ、実証的に解明した力作。
- ▼阿部稔雄編『最新人工心肺—理論と実際—』（二六〇〇〇円）体外循環の実際、病態生理、新しく開発された人工心肺に關係する機械装置・計測機器など最新の知見を盛り込んだ手引書。医師、臨床工学士、看護婦必携。
- ▼石井三記者『18世紀フランスの法と正義』（五六〇〇円）ヴォルテールの関与した冤罪事件、ベッカリアの近代刑法へのインパクトなど、啓蒙から革命までの刑法改革思想の冒険を描き、底流をなす法觀念の変容を析出する。
- ▼大林信治・山中浩司編『視覚と近代—觀察空間の生成と変容—』（三二〇四八円）近代は視覚の時代か—「視覚」と「モダニティ」の關係を、美術史、科学史、思想史、文学史などの領域から探究。歴史的变化を射程に入れ、均質な近代イメージの限界と経験の多様な可能性を問う。

京都大学学術出版会

- ▼『幼児期の他者理解の発達—心のモジュール説による心理学的検討—』小安増生著・四五〇〇円／人間の心のしくみがいくつかの相対的に独立した機能単位から成り立つとする「心のモジュール説」の立場に立ち、視点取得・「心の理論」・社会的知能といった多彩な心理学的概念を用いて、幼児期の心の発達のメカニズムを追う。テキストとしても好適。
- ▼『総合的地域研究』を求めて—東南アジア像を手がかりに—坪内良博編著・五四〇〇円／地域をとらえる〈総合的〉な視座こそが多様性と共存の時代を支えるパラダイムを拓く—新しいフロンティア論、世界単位、エコ・アイデンティティ：など、わが国の中心的研究者が、二十一世紀の地域研究に新しい認識と方法を提示する画期的論集。
- ▼『Landslides of the World…世界の地すべり』地すべり学会国際部編著・一六〇〇〇円／人口増加、都市開発とともに増え続ける地盤災害…。「国際防災の十年」の最終年にあたり、過去十年の世界の主要な地すべり、土石流、岩盤崩落など約百事例を豊富な図版入りで報告。

大阪経済法科大学出版部

- ▼藤田 整著『The Soviet Economy as a Social Experiment』（B9判・九四頁・二〇〇〇円）二〇世紀の重大事件の一つであるソ連の誕生と崩壊。そのソ連経済を分析した英語論文三編。
- ▼村下 博著『外国人労働者の政策と法』（A5判・一六五〇〇円）長年、外国人労働者問題に取り組んできた著者の集約的刊行。日本の外国人労働者問題の状況、政策と展開。アジアの労働力移動の現状、外国人労働者問題と労働法学の総括と課題。
- ▼韓 義 泳著『文献史的商品学—ドイツ商品学説史—』（A5判・二〇〇〇円）現代マーケティング論の核心たる商品学、文献的商品論の立場から分析し、体系的な商品学説史を展開する。特に、商品学の先進国ドイツの諸学説を整理し、その分析と評価に重点をおく。
- ▼山代義雄著『地方自治法講義—改訂版—』（A5判・二四〇頁・一九〇〇円）長年、大阪府の行政にたずさわってきた著者の経験や事例を取り上げ、地方行政を学ぶ人にとって格好の入門書となっている。

大阪大学出版会

▼脇田晴子／A・ブッシー／上野千鶴子編
著 Gender and Japanese History
(Vol.11) [邦題]『ハンターの日本史』

本書は、すでに刊行されている日本語版『ジェンダーの日本史(上下)』(東京大学出版会刊)が欧米でも評価を得たため、さらに、最近のすぐれた研究成果をつけくわえて英訳されたものである。

内容は、たんに女性のみの方を問うのではなく、男女のかかり合いの中で社会的、文化的に性差がつけられていくことを検証し、日本史を新たな視点から構築していくことをめざしている。

本書は、外国人と日本人の日本研究者による六年間におよぶ共同研究の成果である。また、歴史学・文学のみならず宗教学・社会学・社会人類学・民俗学・言語学・医学・法学など多岐にわたる分野の研究者を糾合しての学際的研究であり、当初から、日本語のみでなく英語版を刊行することが目的とされていた。

今回の英訳化によって、さらに広い範囲の研究者の批評を得るとともに、日本語を解さない人びとも広く読まれることを願っている。

関西大学出版部

▼ダニエル・デフォー研究会訳『ロビンソン・クルーソー挿絵物語』(二〇〇〇円)挿絵とは単に作中のエピソードを視覚化したものではない。それは特定の時代や社会における作品解釈を視覚化したものである。本書は、挿絵という時代を映すアイコンを丹念に読み解くことで、時代とともに変貌するロビンソン・クルーソー神話の姿をダイナミックにとらえた傑作である。▼橋本恭之著『税制改革の応用一般均衡分析』(二七〇〇円)シミュレーション分析を採用することで、税制改革の影響を数量的に把握し、現実的な政策提言と理論分析の間の架け橋となることをめざした研究書。部分均衡から一般均衡へ、短期的分析から長期的分析への多彩なシミュレーション。近年の税制改正の概要や所得税、消費税の仕組みも詳しく解説。税理士をめざす人にも好適。

▼上田惟一著『ピューリタン革命史研究』(二五〇〇円)十七世紀イギリスにおける教会教派の宗教・思想闘争を詳細に分析し、それが当時の政治体制と政治過程に決定的な影響を与えたことを論証しようとした日本で最初の研究書。

九州大学出版会

▼サー・フィリップ・シドニー／磯部・小塩・川井・土岐・根岸訳『アーケイディア』(A5判・五六六頁・九四〇〇円)ギリシャ、小アジア、黒海周辺におよぶ広大な古代世界を舞台とする華麗なパストラルロマンス。英国ルネッサンスの代表的物語文庫、本邦初完訳。▼石部雅亮編『ドイツ民法典の編纂と法学』(A5判・五四八頁・八二〇〇円)ドイツ民法典編纂の過程を歴史的に叙述すると同時に、その個別制度と規定の成立史を詳細に分析。ドイツ民法典公布一〇〇年記念、共同研究論集。▼矢野宏一・矢田脩編『熱帯昆虫学』(A5判・四三〇頁・七二〇〇円)熱帯における昆虫の多様性や華美で驚嘆すべき形態と擬態など古くからよく知られていたにもかかわらず、熱帯昆虫を体系的に記述した書は内外ともなかった。現在世界的な緊急課題である熱帯雨林の破壊を視野に入れて、熱帯昆虫の危機と保護についても解説。生物多様性問題など関係領域の理解と発展にも寄与する。▼上里賢一編『校訂本 中山詩文集』(菊判・三七八頁・八〇〇〇円・九八年三月刊)第二六回伊波普猷賞受賞。

東北大学出版会

▼『TUP叢書3』『父 阿部次郎』

(大平千枝子著、二二〇〇円)

「語り部」として娘が描く、哲学者阿部次郎の老いと死。「……あれほど強かつた父は、私の目の前で、少しずつ少しく弱く父が変わって行き、とうとう消滅してしまつた。……」(本文より)。

精神的にも肉体的にも強い父の姿。その父の老いとのあらがいが、日々勝る死の影。衰微していく肉体と精神。阿部次郎とその家族が、老いと死をどのようにして受け入れていったのか。愛惜のまなざしと透徹した観察力と筆力によって紡ぎ出す幻の名著「父阿部次郎 愛と死」(一九六一年刊行)の増補復刊版。

▼『フォントナーの詩』(藤田 賢著、三五〇〇円)

十九世紀後半のドイツで最も重要な作家の一人、テオドール・フォントナーの「詩」について、訳詩・詩論を合わせた「詩人」フォントナーの全体像を説明する。普遍的な詩境、万人共有の心情や感懐が巧みに表現されている作品の他、晩年の心境や見解を独特のトーンとリズムによって吐露した作品も紹介されている。

流通経済大学出版社

▼根橋正一著『上海—開放性と公共性』

(A5判・二六〇頁・四〇〇〇円)

本書が問題にしているのは上海の街に満ちる活力である。上海の活力は経済的エゴイズムと開放性とを基礎に持つっており、ある時期には西欧の市民社会に比せられる上海の公共性のあらわれでもあった。その源は上海の形成過程から始まっていた。

しかし、この上海の公共性は社会主義的共同性理念に基づく毛沢東の新中国統一によって活力を奪われ、エゴイズムや家族中心主義が助長された。

現在、中国政府が進めている改革開放政策の成否の鍵は、中国を社会主義的共同性から上海の公共性へと方向転換させられるかどうかである。

この観点から、今後の中国の動向を予測する際、江沢民総書記を始め朱鎔基首相、黄菊、呉邦国、丁関根などの中央指導者が上海人あるいは上海で社会的、政治的な基盤を築いてきた人々たちであり、上海の公共性の継承者であることを忘れてはならない。

三重大学出版会

▼『地方からの農政改革—三重県の挑戦—』

(石田正昭編、2400円) いま、我が

国の行政システム全般で非効率やアカウンタビリテイの低さが問題となっており、様々な議論が行われている。ただし、そのような議論の多くは行政外部からのものであり、実現可能なシステム変革の提案が行われることは少ない。

三重県は国からの強い反発を受けながらも実質的な行政システム改革に努力している。本書は三重県の大学研究者と、当事者である県庁職員の合作による、農政システム改革についての分析と提言である。建前でない本音の、現場からの農政改革に関する議論は他の行政改革にも参考になる。

▼『高等物理学教程(量子力学篇)』(阿閉義一、4月刊行予定) 本書は『高等物理学教程(力学・電磁気学編)』、『同(代数・幾何編)』に続く著者3冊目の物理学教科書である。オーソドックスな正準量子化の方法を紹介し、量子論の代数構造とその表現論、および実際の量子系を取り扱う際に必要とされる種々の近似法の問題等を取り扱う。

新刊案内 '99・1 3

北海道大学図書刊行会

New Aspects of Perinatal Medicine and Perinatal Hemostasis

鈴木重雄・中林正雄・石川睦男・A.H.Sutor・J.Dudenhausen 編

八〇〇〇円

さよなら古い講義―質問書方式による会話型教育への招待―

田中 一 一八〇〇円

環境の価値と評価手法―CVMによる経済評価―

栗山 浩一 四七〇〇円

人権論の新展開 北大法学部ライブラリー

高見勝利編 四八〇〇円

私法学の再構築 北大法学部ライブラリー2

瀬川信久編 六〇〇〇円

Small Sample Properties of Improved Estimators in Econometrics

長谷川 光 二二〇〇円

日本スキー・もうひとつの源流―明治四五年北海道―

中浦 皓至 三五〇〇円

Circadian Clocks and Entrainment

本間研一・本間さと編 一八〇〇〇円

花の自然史―美しさの進化学―

大原雅編著 三〇〇〇円

北海道金鉱山史研究

浅田 政広 八二〇〇円

正義―社会秩序の基本原理

エーミル・ブルンナー／寺脇不信訳 五八〇〇円

慶應義塾大学出版会

ビット産業社会における情報化と都市の将来 伊藤滋監修／光多長温・日端康雄編著 一五〇〇円

グループ・インタビュの技法

S・ヴォーン他／井下理監訳／田部井潤・柴原宜幸訳 二六〇〇円

福澤論の百年〈Keio UP選書〉

西川俊作・松崎欣一編 二二〇〇円

アジア・インフラストラクチャー

21世紀への展望〈慶應義塾大 学地域研究センター叢書〉 藤原淳一郎編 三二〇〇円

データ分析入門(第2版)「JMP IN対応」

慶應SFCデータ分析教育グループ 三五〇〇円

女? 日本? 美? ―新たなジェンダー批評に向けて―

熊倉敬聡・千野香織編著 二五〇〇円

産能大学出版社

新しいサービスの発音が聞こえる 高谷 和夫 一六〇〇円

今、いちばん大切なこと

女性マネジメント・フォーラム編 一五〇〇円

思いをかなえるために必要なこと

西田 育生 一五〇〇円

起業の心得

松井 利夫 一六〇〇円

英文電子メール作成百科

小坂貴志／デリーナ・ラッセル共著 二三〇〇円

専修大学出版社

江戸城下町における「水」支配 坂詰 智美 四五〇〇円

開放講座 夢と遊びどころ

右巻専修大学開放センター編 一四〇〇円

戦後大学改革

羽田 貴史 四五〇〇円

「国際化」とは何か

光田 明正 二六〇〇円

現代の大学・高等教育—教育の制度と機能—

喜多村和之 四五〇〇円

誰でも何でも学べる大学—ケンブリッジ大学人が見た—

アシユビ／宮田敏近訳 二四〇〇円

アメリカの高等教育—

小笠原道雄編 六五〇〇円

精神科学的教育学の研究—現代教育学への遺産—

次男 一三〇〇〇円

フレibel教育学の研究

岩崎 勝 一〇〇〇〇円

日本人学校の研究—異文化間教育史的考察—

小島 勝 一〇〇〇〇円

戦間期日本の高等教育

伊藤 彰浩 六二〇〇〇円

夢の時を求めて—宗教の起源の探求—

増澤知子／中村圭志訳 四八〇〇〇円

■中央大学出版部

後藤 弘樹 五五〇〇〇円

アメリカ英語方言の語彙の歴史的研究

Toward Comparative Low in the 21st Century

フランス公法講演集

日本比較法研究所編 三〇〇〇〇円

中央省庁の政策形成過程—日本官僚制の解剖—

L・ファボラー他著／植野妙実子編訳 三〇〇〇円

城山英明・鈴木寛・細野助博編著

大学生の時間的展望

都筑 学 六〇〇〇円

—構造モデルの心理学的検討—

森末 伸行 二三〇〇〇円

正義論概説

統ヌーヴォー・ロマン周遊

鈴木 重生 四四〇〇円

■東海大学出版会

—現代小説案内—

社会的かかわりにおける運動行動

望月享子ほか 二四〇〇円

—障害・高齢化・国際化を中心に—

大井 徹 二五〇〇円

失われ行く森の自然誌—熱帯林の記憶—

吉田正廣・松浦武信 一八〇〇円

物理・工学のためのフリーエ変換とデルタ関数

波浪の解析と予報

磯崎一郎・鈴木靖 三五〇〇円

ビザンツ帝国史

尚樹啓太郎 一六〇〇〇円

図・建築表現の手法

図研究会 二八〇〇〇円

日本産土壌動物—分類のための図解検案—

青木淳一編著 二五〇〇〇円

シリーズ 大学の教育・授業を考える

①大学の教育・授業をどうする—FDのすすめ—

日本私立大学連盟編 一九〇〇円

シリーズ 大学の教育・授業を考える

②大学の教育・授業の変革と創造—教育から学習へ—

日本私立大学連盟編 一九〇〇円

記号学研究(第十九卷)

ナシヨナリスム／グローバリゼーション

日本記号学会編 三〇〇〇円

なぜ日本では臓器移植がむずかしいのか

—経済・法律・倫理の側面から—

高月義照ほか 二〇〇〇円

■東京大学出版会

新老年学〔第2版〕

折茂肇編集代表 三六〇〇〇円

講座社会学 4 都市

奥田道大編 三二〇〇円

中国仏教史 第六卷 隋唐の仏教(下)

鎌田 茂雄 一八〇〇〇円

バリ—観光人類学のレッスン—

山下 晋司 三二〇〇〇円

日本の競争政策

後藤晃・鈴木興太郎編 四四〇〇〇円

政治学講義

佐々木 毅 二八〇〇円

フランス資本主義と中央銀行—フランス銀行近代化の歴史—

榎上 康男 一〇〇〇〇円

超伝導—多体電子論II—

青木秀夫・黒木和彦 三八〇〇円

齋脚類—アシカ・アザラシの自然史—

和田一雄・伊藤徹魯 四八〇〇円

溪流生態砂防学

太田猛彦・高橋剛一郎編 三四〇〇円

帝国議会貴族院委員会速記録

昭和篇108

帝国議会衆議院委員会速記録

昭和篇144

国立国会図書館所蔵 一四〇〇〇円

法の臨界Ⅰ 法的思考の再定位 一八〇〇〇円
井上達夫・嶋津格・松浦好治編

先進諸国の社会保障Ⅰ イギリス 三二〇〇円
武川正吾・塩野谷祐一編

先進諸国の社会保障Ⅱ ニュージーランド・オーストラリア 五二〇〇円
小松隆二・塩野谷祐一編

大学―挑戦の時代 五二〇〇円
天野 郁夫 一八〇〇円

講座社会学6 労働 三〇〇〇円
稲上毅・川喜多喬編

福祉国家の再編成―「分権化」と「民営化」をめぐる日本的動態― 四六〇〇円
藤村 正之

〈社会学シリーズ〉 情報化とアジア・イメージ 情報社会の文化Ⅰ 二七〇〇円
青木保・梶原景昭

日米関係資料集 一九四五―一九七 一八〇〇円
細谷千博・有賀貞・石井修・佐々木卓也編

ヨーロッパ法史入門 権利保護の歴史 二四〇〇円
クヌート・W・ネル著／村上淳一訳

進化論的計算の方法 二八〇〇円
伊庭 斉志

東海沖の海底活断層 二八〇〇円
東海沖海底活断層研究会編

日本荘園絵図聚影四 近畿三 五五〇〇円
東京大学史料編纂所編

高山寺本東域傳燈目錄 高山寺資料叢書一九 二〇〇〇円
高山寺典籍文書総合調査団編

帝国議会貴族院委員会速記録 昭和篇109 一四〇〇円
帝国国会図書館所蔵

帝国議会衆議院委員会速記録 昭和篇145 一八〇〇円
帝国国会図書館所蔵

法の臨界Ⅱ 秩序像の転換 三二〇〇円
井上達夫・嶋津格・松浦好治編

法の臨界Ⅲ 法実践への提言 三二〇〇円
井上達夫・嶋津格・松浦好治編

子どもと音楽〈シリーズ人間の発達11〉 梅本 堯夫 二五〇〇円
出土銭貨の研究 鈴木 公雄 五四〇〇円
講座社会学14 ジェンダー 三〇〇〇円
鎌田とし子・矢澤澄子・木本喜美子編

日米関係と東アジア―歴史的文脈と未来の構想― 五十嵐武士 四二〇〇円
内田 貴 三二〇〇円

民法Ⅰ〔第2版〕総則・物権総論 浅香 吉幹 三八〇〇円
現代アメリカの司法 齋藤静樹監訳／筒井知彦・川本淳・村瀬安紀子訳 四二〇〇円

企業分析入門 K・G・パレプ、V・L・バーナード、P・M・ヒリー著 森田 康夫 三八〇〇円
整数論〈基礎数学13〉

分数量子ホール効果〈多体電子論Ⅲ〉 青木秀夫・中島龍也 三八〇〇円
廣田 勇 三六〇〇円

気象解析学―観測データの表現論― 生命と物質―生物物理学入門― 永山 國昭 二八〇〇円
正倉院文書目録四 続修別集

帝国議会貴族院委員会速記録 昭和篇110 一四〇〇円
帝国国会図書館所蔵

帝国議会衆議院委員会速記録 昭和篇146 一八〇〇円
帝国国会図書館所蔵

東京電機大学出版局 Logoで知る認知科学―工学のための教育メモランダム― 正田 良 二〇〇〇円

たのしくできるセンサ回路と制御実験 鈴木美朗志 二四〇〇円
機械力学と構造 小峯 龍男 二三〇〇円

システム開発の体系―JIS X 0160／共通フレーム98対応― 日本ユニシス情報技術研究会編 三四〇〇円
直流送電工学 町田武彦編著 三四〇〇円

ネットワークスペシャリスト試験問題集 午前〈合格精選400題〉 荒川 幸式 二六〇〇円

電気・電子のための基礎英語―数式・図形・電気の英語表現―

学生のための一太郎&Lotus 1-2-3@Windows88
西口 昌宏 一九〇〇円

複素解析学〈工科系数学セミナー〉
安達謙三他 二二〇〇円

フリーエ解析と偏微分方程式〈工科系数学セミナー〉
数学教育研究会編 一九〇〇円

コンピュータグラフィックスの基礎理論〈理工学講座〉
村上 伸一 二〇〇〇円

看護動作を助ける基礎人間工学
第二級陸上無線技術士試験問題集〈合格精選300題〉
小川 鐘一 二八〇〇円

回路理論〈基礎テキスト〉
吉川 忠久 二七〇〇円

QSI9000第3版解釈と運用
間邊幸三郎 二九〇〇円

MATLABによる制御工学
高林 貞夫 四六〇〇円

機械製法要論〈理工学講座〉
足立 修一 三二〇〇円

化学工学の計算法〈化学計算法シリーズ4〉
白井英治・松村隆 三二〇〇円

自転車と健康
大賀文博他 二四〇〇円

電気応用と情報技術〈基礎テキスト〉
前田 寛他 二二〇〇円

デジタル／アナログの違いのわかるIC回路セミナー
前田 隆文 二三〇〇円

白土 義男 二六〇〇円

東京農業大学出版会
東京農業大学醸造科学科と酒づくりのはなし
竹田 正久 一四〇〇円

法政大学出版局
フロベールのエジプト G・フロベール／斎藤昌三訳 三五〇〇円

火と文明化 J・ハウプブロム／大平章訳 三六〇〇円

黄色い街(小説) V・カネッティ／池内紀訳 二三〇〇円

詩におけるルネ・シャール P・ヴェヌヌ／西永良成訳 九四〇〇円

少子化と社会法の課題〈法政大学現代法研究所叢書18〉
高藤昭編著 三三〇〇円

ダーウィン、マルクス、ヴァーグナー―知的遺産の批判―
J・バーザン／野島秀勝訳 五二〇〇円

さつまいも〈ものと人間の文化史90〉
坂井 健吉 二八〇〇円

21世紀の私立大学像
清成 忠男 一八〇〇円

E・モラン自伝―わが雑食的知の冒険―
E・モラン／菊地昌実・高砂伸邦訳 三五〇〇円

マラー―音楽観相学―
E・W・アドルノ／龍村あや子訳 二八〇〇円

ヘーゲル伝―哲学の英雄時代―
H・アルトハウス／山本尤訳 六七〇〇円

日米行政協定の政治史―日米地位協定研究序説―
明田川 融 七七〇〇円

植民地鉄道と民衆生活―朝鮮・台湾・中国東北―
高 成 鳳 七四〇〇円

共同生活―一般人類学的考察―
T・トドロフ／大谷尚文訳 二六〇〇円

珊瑚(さんご)〈ものと人間の文化史91〉
鈴木 克美 三二〇〇円

地位と羞恥―社会的不平等の象徴的再生産―
S・ネットケル／岡原正幸訳 四三〇〇円

無垢の誘惑
P・ブリュックネル／小倉孝誠・下澤和義訳 三五〇〇円

シンボル・技術・言語
E・カッシーラー／篠木芳夫・高野敏行訳 三八〇〇円

岐路に立つニーチェ―二つのペシミズムの間で―
清水 真木 三〇〇〇円

アメリカ経済の再工業化―生産システムの転換と情報革命―
萩原進・公文溥編著 四〇〇〇円

レジャーと現代社会―意識・行動・産業―
村串仁三郎・安江孝司編著 四六〇〇円

土地と自由(四) 〈日本社会運動史料・機関紙誌篇〉

法政大学大原社会問題研究所編 三一〇〇〇円

韓国現代政治の条件 〈韓国の学術と文化・1〉

崔章集／中村福治訳 三六〇〇円

哲学 50号―特集・時代の危機と精神的価値―

日本哲学会編 二〇〇〇円

日本煉瓦史の研究 水野信太郎 一一五〇〇円

◎日本生命財団出版助成図書 水野信太郎 一九〇〇円

スポーツ社会学研究 7 日本スポーツ社会学会編 一九〇〇円

聖ブランドン航海譚―中世のベストセラ―を読む―

藤代幸一訳著 一八〇〇円

ラカンの思想―現代フランス思想入門―

M・ボルクハヤコブセン／池田清訳 五二〇〇円

羨望の炎―シェイクスピアと欲望の劇場―

R・ジラル／小林昌夫・田口孝夫訳 六六〇〇円

パベルの後に(上) G・スタイナー／亀山健吉訳 五〇〇〇円

■放送大学教育振興会

教育の方法 佐藤 学 二〇〇〇円

道徳教育〔新訂〕 木原孝博・大西文行 四〇〇〇円

現代社会の学力〔改定版〕 駒林 邦男 二六〇〇円

メディアと教育〔新訂〕 白鳥元雄・高桑康雄 二二〇〇円

国際化と教育〔新訂〕 秦 政衛 二二〇〇円

生徒指導 佐藤 学 二二〇〇円

教育の中の言葉 永野 重史 二二〇〇円

教育評価〔改定版〕 梶田 毅一 二六〇〇円

臨床心理学概説 馬場 禮子 二〇〇〇円

宗教への招待 大峯 顯 二〇〇〇円

ギリシャ哲学 天野 正幸 二六〇〇円

西洋近世哲学史〔改定版〕 量 義治 二二〇〇円

美と詩の哲学 渡邊 二郎 二六〇〇円

近代詩歌の歴史 野山 嘉正 二四〇〇円

書誌学

発掘された古代日本

言語学〔新訂〕

博物館概論

生活と地球社会

近代社会と人生経験

着こちの追究

地域と食文化

世界の住まいと暮らし

こころの健康科学

医療・社会・倫理

高齢者福祉

地域福祉

商法〔新訂〕

雇用と法

現代法の諸相〔改定版〕

政治過程の比較分析

現代日本の政治変動

金融論〔新訂〕

日本経済史〔改訂版〕

科学と経済史〔新訂〕

社会学の歴史

生産性科学入門〔新訂〕

企業の経済学

管理会計〔改訂版〕

産業と労使の関係

マーケティング論

ジェンダーの社会学〔新訂〕

都市空間の比較社会学

環境社会学

発展途上国の開発戦略

杉浦 克己 三八〇〇円

白石 孝男 二八〇〇円

大江 孝一 二六〇〇円

石森 秀三 二六〇〇円

清野きみ・原ひろ子 二六〇〇円

正岡寛司・嶋崎尚子 三二〇〇円

田村照子・酒井豊子 二六〇〇円

石川 寛子 二〇〇〇円

服部 岑生 二四〇〇円

仙波純一・高橋祥友 二四〇〇円

近藤喜代太郎・藤木典生 二四〇〇円

直井道子・山田知子 二八〇〇円

大橋 謙策 二二〇〇円

森本 滋 二六〇〇円

諏訪 康雄 二六〇〇円

水野 忠恒 二二〇〇円

大嶽秀夫・野中尚人 二四〇〇円

山口 二郎 二〇〇〇円

岩田規久男 二〇〇〇円

原 朗 二二〇〇円

藤瀬 浩司 二六〇〇円

道家達将・赤木昭夫 三八〇〇円

小林 和生 二四〇〇円

黒澤 昌子 三〇〇〇円

古川浩一・佐藤宗彌 二〇〇〇円

神代 和欣 二八〇〇円

田村 正紀 二〇〇〇円

江原由美子・山田昌弘 二〇〇〇円

倉沢 進 三二〇〇円

鳥越 皓之 二二〇〇円

河合 明宣 二八〇〇円

都市・地域経営

小泉允園・岡崎昌之・林亜夫
二六〇〇円

エネルギー工学と社会
情報工学〔新版〕

牛山 泉
三〇〇〇円

21世紀への技術発展
微積分入門Ⅱ

都倉 信樹
三六〇〇円

線型代数Ⅰ〔新訂〕
応用数学〔三訂版〕

森谷 正規
二二〇〇円

数学基礎論〔改訂版〕
計算の理論〔改訂版〕

斎藤 正彦
二四〇〇円

パソコンによる解析学
物理の世界〔新訂〕

長岡 亮介
二四〇〇円

物理・化学通史
相対論〔改訂版〕

藤田 宏
二八〇〇円

物質の科学・反応と物性
物質の科学と技術開発〔新訂〕

野崎昭弘・仙波一郎
二〇〇〇円

人間の生物学〔新訂〕
生物の進化と多様性

阿部龍蔵・遠山絃司
三〇〇〇円

生態学〔新版〕
太陽系の科学〔新版〕

橋本 毅彦
二六〇〇円

日本語の地球科学〔改訂版〕
英語Ⅳ〔99〕

藤井 保憲
二八〇〇円

英語Ⅵ〔99〕
スペイン語Ⅰ〔99〕

土屋莊次・平川暁子
三〇〇〇円

地球環境を考える
現代日本の教育課題

平川暁子・道家達将
三六〇〇円

現代日本の地方自治
明星大学出版部

新井康允・近藤洋一
三〇〇〇円

教育史散策
早稲田大学出版部

森脇和郎・岩槻邦男
三〇〇〇円

キャンパス情報化最前線―早稲田大学文学部の試み―
早大文学部情報化検討委員会編

小尾信彌・吉岡一男
二八〇〇円

オーウェル―時代を超える精神―
産業社会の発展と議会政治―一八世紀イギリス史―
奥山 康治 四〇〇〇円

電産型賃金の世界―その形成と歴史的意義―
松園 伸 三六〇〇円

イギリスの行政〔新装版〕
シリーズ高齢社会とエイジング(全8巻)第6・7回配本/第8・5巻
河西 宏祐 五六〇〇円

エイジングの政治学
高齡者のライフスタイル
下條美智彦 二七〇〇円

早稲田大学理工総研シリーズ第11・12巻
東京の深層地下〔土木編〕―具体的提案と技術的検討―
内田満・岩淵勝好 二六〇〇円

市民が主役のまちづくり―富山県魚津市の挑戦―
森麟・小泉淳博著 二〇〇〇円

叢書ワセダ・リブリ・ムンディ第29巻
ドイツの統合
尾島俊雄・浜多弘之 二〇〇〇円

■名古屋大学出版会
近代中国と海関
大西健夫/U・リンス編 二九〇〇円

最新人工心肺―理論と実際―
18世紀フランスの法と正義
岡本 隆司 九五〇〇円

視覚と近代―観察空間の生成と変容―
大林信治・山中浩司編 三〇四八円

アメリカ帝国主義成立史の研究
豊田喜一郎文書集成
高橋 章 五八〇〇円

■京都大学学術出版会
ギリシア史2〔西洋古典叢書I-15〕
クセノポン/根本英世訳 三〇〇〇円

幼児期の他者理解の発達―心のモジュール説による心理学的検討―
小安 増生 四五〇〇円

The Nation and Economic Growth: Korea and Thailand
吉原久仁夫 五四〇〇円

〈総合的地域研究〉を求めて—東南アジア像を手がかりに—

坪内良博編著 五四〇〇円
Landslides of The World: 世界の地すべり
地すべり学会国際部編著 一六〇〇〇円

■大阪経済法科大学出版部
The Soviet Economy as a Social Experiment

藤田 整 二〇〇〇円
村下 博 六五〇〇円
外国人労働者の政策と法
文献史的商品学—ドイツ商品学説史—
韓 義 泳 二〇〇〇円

■大阪大学出版会
内科医のための心臓移植ハンドブック
堀正二・松田暉監修／是恒之宏編集 八〇〇〇円
現代ロシア人の意識構造 五十嵐徳子著 六〇〇〇円

Gender and Japanese History (Vol. I, II)
A・ブッシィ／上野千鶴子編著(一)七四〇〇円(二)八四〇〇円
協田晴子

■関西大学出版部
動的経済システムの最適制御
『ロランソン・クルーソー』挿絵物語
村田 安雄 三六〇〇円

ダニエル・デフォー研究会訳
税制改革の応用一般均衡分析 橋本 恭之 二〇〇〇円
唐詩新攷 森瀬 壽三 三一〇〇円

経済学教育論の研究 岩田 年浩 五七〇〇円
ビュリタン革命史研究 上田 惟一 三五〇〇円

■九州大学出版会
ヒトスジジマカ形態写真集
—パイオセンサー・マイクロナシンの観点から—
真喜屋清監修 三〇〇〇円

生活習慣と主要部位のがん
日本がん疫学研究会がん予防指針検討委員会編著 一九〇五円
子どものこころの病理とその治療 村田 豊久 二七〇〇円

The Reception of D. H. Lawrence Around the World
飯田武郎編 七二〇〇円

ソ連政治秩序と青年組織—コムソールの実像と青年労働者の
社会的相貌一九一七—一九二九年— 松井 康浩 六八〇〇円
ドイツ民法典の編纂と法学 石部雅亮編 八二〇〇円
ドイツ財政調整発展史—戦後から統一まで—

W・レンチュ／伊東弘文訳 七二〇〇円
イギリス関税改革運動の史的分析 桑原 莞爾 六五〇〇円
アーケイディア サイ・フィリップ・シドニー 九四〇〇円

磯部・小塩・川井・土岐・根岸共訳 四〇〇〇円
運動反応の心理メカニズム クラフチック・マリウシュ 四五〇〇円
東欧の市場経済化 矢野宏二・矢田脩編 七二〇〇円
熱帯昆虫学

Recent Advances in Physiological Anthropology
佐藤方彦・登倉尋實・綿貫茂喜編 一五〇〇〇円
少年団運動の成立と展開—英国ボーイスカウトから学校少年団まで—
田中 治彦 七六〇〇円

■東北大学出版会
Carcinoma of the pancreas and biliary tract:
Recent underlying problems
涌井昭・山内英生・大内清昭編著 五〇〇〇円

材料電磁プロセスニング 根橋 正一 四〇〇〇円
材料電磁プロセスニング研究グループ編 二〇〇〇円

■流通経済大学出版会
上海—開放性と公共性— 根橋 正一 四〇〇〇円
■三重大学出版会
地方からの農政改革—三重県の挑戦— 石田正昭編 二四〇〇円

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 TEL. 048-725-9801 FAX. 048-725-0324
慶應義塾大学出版会	〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-6926 FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152-0035 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101 FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4230 FAX. 03-3263-4288
玉川大学出版部	〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 042-739-8935 FAX. 042-739-8940
中央大学出版部	〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351 FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151-8677 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL. 03-5478-0891 FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101-8457 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-5280-3433 FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-5477-2562 FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-7 TEL. 03-5214-5540 FAX. 03-5214-5542
放送大学教育振興会	〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 042-591-9979 FAX. 042-593-0192
早稲田大学出版部	〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551 FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-0814 名古屋市中種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581-8511 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211 FAX. 0729-41-9979
大阪大学出版会	〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-6877-1614 FAX. 06-6877-1614
関西大学出版部	〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-6368-1121 FAX. 06-6389-5162
九州大学出版会	〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内 TEL. 022-214-2777 FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301-8555 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX. 0297-64-0011
三重大学出版会(準会員)	〒514-8507 三重県津市上浜町1515 三重大学出版ホール内 TEL. 059-232-1356 FAX. 059-231-1356

大学出版(第41号)'99春 平成11年4月10日発行 発行所/大学出版部協会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)7956

E-MAIL: ajup@lian.com URL: http://www.lian.com/AJUP/

頒布価格100円 円共